

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十四年十二月二十五日 印刷 昭和四十五年一月一日発行

第三十六卷 第一号



目 次

表紙「日の出」 松濤達文画

梅花の愛情……………	岸 信 宏…………	(2)
一枚起請文と浄土信仰(中)……………	香 月 乗 光…………	(4)
「いぬ」の年……………	安 居 香 山…………	(7)
聖典解説 「小消息」の御法語に学ぶ①……………	小 沢 勇 貫…………	(10)
法然上人二十五霊場をめぐりて⑥……………	村 上 博 了…………	(13)
地藏さまの頭は何故円い(上)……………	川 上 法 俊…………	(18)
念仏生活 五重相伝のお話し①……………	藤 井 実 応…………	(22)
聖典物語① カピラ城の滅亡……………	つるたんせん…………	(27)
浄土の宝物① 「関東浄土宗法度」……………		(32)



今月のことば

現代は断絶の時代といわれ「対話」が至要なものとされている。しかし世上に行われている対話なるものは相互交流の媒介をなすというよりは、自己主張をもととした「対決」に終るのみである。

一七九九年、フランスにナポレオンのクーデターがおこり普（独）仏風雲急をつけ、フィヒテは有名な愛国の演説「ドイツ国民に告ぐ」を絶叫した。シュライエルマツヘルもまた格調高い愛国的説教を仏軍占領下のハルレ大学のチャペルでおこなった。彼はドイツを見舞ったこのような運命を大いなる歴史的変革として甘受し、むしろ古きドイツが死に新しい生命にあふれた自由ドイツの誕生をのぞんだのである。彼はかかる外部的變動に対処するためには内部的自己の確立をおいてないことを主張した。彼によれば無限なるもの、永遠なるものとしてあらわれることなく、かえって有限な特殊なるもの、すなわち個体のなかに映現するものである。したがって個体はそれぞれ全体の映像であり、人間的個性は宇宙の永遠なる表現としての小宇宙にほかならない。それゆえ、われわれにとって大切なことは、この生滅し転変する現実のただなかにおいて、永遠なる自己を直観することである。つまり「自己の直観」こそ人類の新しい歴史に立ちむかうただ一つの仕方なのである。かくして彼は「自己直観」のための「モノローグ」（独語録）を著わしたのである。その一節に彼はいつている。

「人間が人間に贈りうるもののうちで、もっとも心おきない贈物は、人間が心情の奥底で、自分自身に語ったものをおいてほかにない。それはあらゆる神秘のうちの最も神秘なものを、自由な本質を洞察するあの広い無礙な目を、人間に与えてくれるからである」

現在、人みな相剋の嵐のうちにあるとき、ただうわべだけの対話はいたずらに対決に終らざるを得ない。真実に断絶をのりこえるには、すべてのものが自己自身に語りかけ、モノローグすることをもってはじめてなければならない。

シュライエルマツヘルは「モノローグ」を一八〇〇年の初頭に公けにした。それにちなんで本誌の初頭にこれを掲げたのである。

（竹中）

岸 信 宏

昭和四十五年正月の御歌会初めの御題を「花」と仰せ出されています。この混乱と不安の御時勢に何という美しい御題でありましょうか。皇后陛下は絵画の御たしなみが深く、昨年秋に『錦芳集』という画集を御出版になりましたが、美しい草花の御写生が多く、おのずからそなわる高い御気品の御筆のあとに心あたたまる思いがするのであります。春の花と申しますと、まず梅の花が心に浮かぶのであります。「梅一輪、一輪づつのあたたかさ」という俳句があったと思いますが、庭に或は野山に梅の花が咲きかけますと、春が来たという感じを催すのであります。私の唯今住んでいます知恩院の奥の庭はまことに手ぜまでありますが、私の参りました当時にはかなり年数を経た寒紅梅の木が一本ありまして、大寒の時分から八重の紅梅が一輪ずつ咲きかけまして、春の風情を味ったのであります。が、十年程前に枯れてしまいました。その紅梅が咲いていましたところ、信者の老婦人から私は梅の花について、ゆかしい話を聞きました。それは梅の花は、最初に咲いた花が最後に咲く花を見とどけて散るといふ話であります。梅花の愛情とでもいうのでしょうか。このことは地藏菩薩が最後の衆生の一人が救われるまでは仏果にのぼらないという誓願のために、いつまでも比丘形をして、市井や路傍に立って、迷える衆生を導いていられる姿によく似ていると思われれます。いつまでも仏果にのぼらない地藏菩薩のことを大悲闡提（だいひせんたい）と申しています。闡提とは仏果にのぼることのできない無性有情（むしやうじやう）のことであると『唯識論』では申していますが、このことは一切の衆生に仏性ありとする大乘仏教の見地からいつも大きな問題となっておりまして、唯識の学問の上では理仏性、行仏性ということをして、無性有情が仏果にのぼることのできないとするのは、行仏性の上であって、理仏性の上ではないとするのであります。阿頼耶識（あらやしき）の中には仏性の種子（しゅうじ）も所蔵せられてあ



梅花の愛情

るのですが、それを現行（げんぎょう）せしめる実践行為がないために、仏性を開発して仏果にのぼることができないとするのであります。釈尊最後の説法といわれる『涅槃経』には闡提成仏を称えて、一切衆生の成仏を説くに至ったのであります。

一切衆生の成仏を最も可能の姿で説くのが、阿弥陀仏の本願による一切衆生救済のための口称の念仏の実践であります。この念仏のみ教によって浄土宗という一宗を開かれたのが我が法然上人でありまして、来る昭和四十九年には、立教開宗八百年の記念を迎えることになっていきます。

最初に咲いた花は最後の花の咲くを見とどけて散るといふ梅花の愛情は、最後の一人まで救わなければ仏果にのぼらないという誓願のために、比丘形をして市井や路傍に立っていられる地蔵菩薩の大悲の精神に、私はほのぼのとした温い感じを催すのであります。我が国土のいたるところ、ことに道のわかれていくようなところに、旅人が道に迷わぬようにと石の地蔵菩薩の尊像がまつられてあるのを見るのであります。昔の人々のたくまざる仏教精神の発露とも見るべきでありましょうか。

このごろは自動車による交通事故のために犠牲者の多く出たところに地蔵尊が建立せられていくのをよく見かけるのであります。遺族の人達の哀悼と、交通者への警鐘として深い敬意を捧げざるを得ませぬ。

初花は終りの花のさくをまち

散るとつたふる梅の花かな

一枚起請文と浄土信仰(中)

大正大学女子実践仏教講話より



香 月 乗 光

(仏教大学教授)

それでは一枚起請文の文章を一通り通釈しておきたいと思っています。

中国や日本の仏教の学問をし、修行をつんだ多くの智者達が、いろいろと沙汰されるところの観念の念(註一)でもない。また仏教の学問をして、念ということの意味を悟って申す念仏でもない。唯極楽に往生していくためには、ひとすじに南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生できると思ひとて申す外には別にくわしく心得ておくことはないのである。ただし三心や四修(註二)というようなこともあるが、これらは皆南無阿弥陀仏と申せば定んで往生できると思ううちにこもってしまうのである。このほかに、奥深い旨があるという考えをもつなら

ば、お釈迦さまと阿弥陀さまとの二尊のあわれみにはずれ、阿弥陀さまの誓願からももれてしまうのである(註三)。念仏を信じようとする人はたとえお釈迦さまご一代にわたってお説きになった教えをよく学んだとしても、一文も知らない愚かな身にかえって、在家のまま髪を剃った尼入道のともがらと同じように無智になって、智者のふるまいをすることなく、ただ一向にお念仏をとえなさい。

〔註一〕観念とは、散り乱れる心をおちつきまとめ、思いをこらして仏のおすがたを観ずることです。法然上人のお説きになったお念仏は仏の名号を口に称える称名仏であつて、心をこらして仏を観ずるようなお念仏ではありません。

〔註二〕三心とは、至誠心・深心・回向発願心、四修とは、恭敬修・無余修・無間修・長時修です。

〔註三〕この「二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候べし。」というところに、起請文といわれる所以があります。つまり起請といわれるのは、二尊に起請せられたということで、そこに法然上人の強く堅い念仏信仰のあら

われがあるといってもよいでしょう。

この一枚起請文の中、特に重要な二つの文について、更にくわしく述べたいと思います。この二文に法然上人のお念仏の精髓、浄土の教えの真髓が示されているからです。まず、

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかには、別の子細候はず

という文です。この中には二つの重要なことが述べられています。その一つは、極楽に往生するためにはただ南無阿弥陀仏と申すばかりでできるということ、その二は南無阿弥陀仏と申せば、疑いなく往生であると心に思いとること、これであります。専門的に申しますと初めの方を安心といっております。

私たちの心は常に三毒煩惱といわれるむさぼりの心、怒りの心、おろかさの心によって動かされ、この世の理法を見きわめることができないために乱されておりす。例えば、人間は生れたならば必ず死ぬというのは動かせない天地の理法です。けれどこれを本当に心から受けとっている人は少なく、平生は死ぬことを忘れて、ただ生きることだけをみております。これは人生の半分しかみていない、いや全くみていないといってもよろしいでしょう。何故なら生の中に死があ

るからです。生きているということはいつ死ぬかわからないということ、生と死はとなりあわせであるというよりは、生の中に死があるということでしょう。いやむしろ死のまっただ中に生があるという方が本当でしょう。

その理法を本当に身につけていない、それを見きわめようとしなさい、そこに人間の抜きがたいおろかさがあります。しかも人は死にたくないのです。死にたくないけれどもこの問題を解決しようとしなさい、生あるものは死すという理法に対して私たちの心の眼はあいていない、そのおろかさを仏教では愚痴といいます。この愚痴はどんなに賢い人、どんなに学問のある人でももっております。

そのために私を取巻く外界のものに対して私の心が働き出る時にこれを間違えてとらえる、あるいは自分自身のことを間違つてとらえる、そこに心の暗さがあります。その人間の心の暗さ、本当のものの道理に明らかでない暗さ、これを愚痴というのです。そしてこの愚痴から私たちの身心を悩ます数知れぬ煩惱がおこり、それにわずらわされて私たちは悩み苦しむのです。そこに人生の問題があるのですが、それに答えを出し、解決していこうというのが仏の教えです。

この点が解決できれば、悟りを開くことになります。ところがこの煩惱は絡みついて仲々私たちから離れようとしませ

ん。そこで法然上人はこの離そうとしても離すことのできない煩惱に動かされる私そのまま、つまり煩惱によって毒されけがされ引きずり廻されている凡夫のままで、阿弥陀さまの救いにあずかることができる念仏の教えを説かれたのです。

煩惱に動かされて休む暇もない心散り乱れるこの私であるが、そのような凡夫のままで、どうかお救い下さいと阿弥陀さまにおまかせする心、念仏を称えたならば必ず阿弥陀さまに救われてお浄土に生れることができると信ずる心、これを安心と申します。今この一枚起請文というならば「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとる」心が安心なのです。そして浄土に往生していくためには、ただひとすじにお念仏を申していく、それだけでよいと教えられたのです。

ただここで申し添えねばならないことがあります。それは阿弥陀仏とはどのような仏さまなのか、極楽とはどのような世界なのか、往生浄土とはどのようなことなのかなどという問題がでてくることです。この一枚起請文は短かいものですが、これらのことが説かれていないのかというと、そうではないのです。ここが法然上人の教えの特色なのです。

この一枚起請文の趣旨をもっと詳しく漢文で書かれたものを選択本願念仏集がごさいます。この書物は法然上人の六十

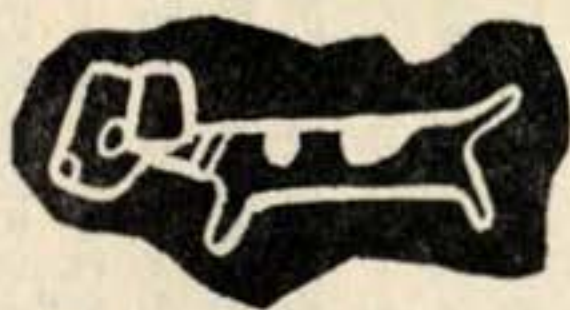
六才の時の著述ですが、すべて十六章からなっており、浄土の教えを筋道をたてて順序よくお説きになっています。この書物をちじめると一枚起請文になるということが出来ます。

ところでこの選択集を見ますと、お念仏に関しては詳しく説き明かされておりますが、阿弥陀仏・極楽・往生浄土などというようなことはほとんど説明がなされておりません。ただ私たちがお念仏を称えることによって阿弥陀さまの国、お浄土へ往生していく、これは阿弥陀さまの本願力によることろであって、この本願他力によって浄土に生れることができるとお説きになっております。

実はこの点が法然上人の教えの一大特色なのです。法然上人の教えは非常に实际的であり、むずかしい理論というものはお控えになっておられます。ですから本願という仏のお力によって往生するということの理論的な説明はありません。勿論理論はあるのですが、理論は裏に廻し、まず念仏せよ、ただ念仏せよとこのことに力をつくし、言を極めて教えておられるのです。

そこに法然上人の実際に即した実践的な教えというものがあることを承知しなければならぬと思います。

「いぬ」の年



安 居 香 山

今年はいぬの年である。いぬは犬と普通書かれ、そこらを走り廻っているいぬのことと

されているが、ご承知のように、十二子では戌という字に書かれている。大変むつかしい字で、当用漢字としては余り使われない字である。この字は、又これに似た字があつて、よく間違えられる。例えば次の三字である。

戌 戌 戌

今の若い人にこの三字の区別を聞いても殆んど知らない。大人でも、一寸首をかしげるに違いない。私は中学生の頃、漢字の先生にこの区別にいつて大変分りやすい方法を教え

てもらった。今でも学生諸君にこれを伝授している。

「、まもり、一の字引けばいぬとなり、何も書かねばボの字のつちのえ」

、を中に入れた字は「まもり」という意味の字で、戌衛・戌守などと熟字される時などに用いられている。これに対して一を中に入れた字は「いぬ」と読まれる字で音は「ジュ」である。中に何も書いてない字は音は「ボ」で暦の上で「つちのえ」と読まれる字である。戌の字は、これもご承知のように十干の中の一つで甲乙丙丁戊と順序されてい

る。読者もこの機会にこの三字の区別を、前に掲げた五七五七七の三十一文字の歌で覚えておいて頂きたい。

ところで、この戌という字の語源であるが、今日、この戌という字を犬に当てはめて十二子の説明をしているのは、語源の上からいうと大変な間違いなのである。漢字の起源は、遠く中国の殷の時代、即ち紀元前一四〇〇年頃までさかのぼりうるのであるが、そのころの文字である亀甲獣骨文字（契文^{けいぶん}という）や、それより下った周の時代の金文などでは、次のように書かれている。

契文

金文

篆文

この字は、契文や金文によって明らかになり、決して犬ではなく、字は斧おもの形をしている通り、「おの」の象形なのである。今日これに類する字は鉞ち（まさかり）である。殷の時代の人が日常用いていた「おの」がそのまま象形化されたのが、この戌という字であろうというのが、今日の学説である。この戌という字が、何故に犬に適用されるようになったかは、その根拠は一向明らかではないが、中国では、已に漢の時代に十二子が動物の名に当てはめて考えられていた事が、鏡の絵など

によって明らかにされている。いずれにしても、随分古い話であるが、アポロが月に着陸する時代になった今日でも、今年は何々の年だなどと、まことしやかに言われているのも、考えてみれば面白い話である。

しかし、われわれの生活の中に生きのこっている習俗などというものは、一朝一夕に消え去るものでもないし、又その中にはわれわれの祖先たちの生活の知恵が織り込まれているのであるから、無下にこれを馬鹿げたことと捨て去る必要もない。十二子などというものも、考えてみれば毒にも薬にもならぬようなものであるが、それだけに何となく生活にうるおいを与えてくれるもので、楽しいものである。玄関先に犬の飾りものや、絵などを置いてその年を迎えるといったことなども、くる年くる年に変化を与え、新しい年を迎えたのだという新鮮美が味われて心楽しい。外国などに比べて日本の正月は、その意味でも、一段と風流なものというべきであろう。

日本人は相手の年などを聞くのに、よく「あなたは何年です」

などと聞く。「私は犬でして」と言われれば、大体その人の年が見当がつく。十二の人を二十四才と間違えるなどはないもので、これなども、「二十四才です」と言われるよりもこの上なく風流で奥ゆかしい。日本人らしい生活言葉である。そして、不思議なもので、その人の性格が、その生れ年の動物にまことによく似ている。牛年の人はのっそりと落ちついていて、馬年の人は活発で走り廻っている。私など夫婦とも「とり」年なもので、こまめであるが、何となくそわそわして落ち着かずにはぎやかである。余りよい年運でもなくて口惜しいので

「鶏口となると、牛後となることなかれ」

などという格言を持ち出してごまかしている。念のため犬年の人はどんな運勢があるのかと、「十二支独り占い」という本を引き出してみると、次のようなことが書かれていた

戌年生れの人には正直にして義理人情にあつければ、官吏、会社員又は商店の店員などとなりて主人長官の信用厚く、随分重要

な地位に拔擢せられ、人の羨む程の出世を為すこともある。しかしと角偏屈にして人を好き嫌い、自分の氣にいらぬものには、口もきかざる風ある故に、親族や朋友と疎遠になることが多い。

犬の性格などからして割り出した運勢なのであろうが、犬年の人で思い当るふしがあったら反省せられることがよいであろう。「当るも八卦、当らぬも八卦」というのが占いの占いたるゆえんであるから、当たっていると思つたら、大いに改めることが望ましいのである。当たっているからと言って、くよくよしたり、がっかりするのは占いの本義でないのである。大隈重信・山県有朋・西園寺公望などという人も、犬年であつたらしいから、国政を左右する大人物にもなれると自負して頑張つて頂きたいものである。

犬についての格言などいろいろあるが、私などイロハかるたで「犬も歩けば棒に当る」など今でも忘れないでいる一つである。どこから出てきたものか知らないが、これにはいろいろの意味があるらしい。

①出しゃばれば人に非難される。

②物事をすれば、とかく禍に逢うことがある。

③働いていれば、何か利益にありつける。

④思いもよらずよい事に出あう。

いずれにしても、犬は余りよい意味では用いられていない。そして、一般には④の意味で使われているようである。

「犬の川端歩き」などというのものもある。何かにありつけないかと、うろうろと目当てもなく歩き廻ることで、犬様にとってはまことに面目のない格言である。「犬の遠吠え」なども、人のいないところで悪口をいうことに譬えられていて、犬にとっては迷惑な格言である。どうも犬は余りよい例に用いられていないで残念である。中国でも孔子様がよい役にもつけず天下を歩き廻っていたとき、「喪家の狗」などと言われている。飼主のいない犬とでもいう意味であるが、これなども全く面目のない犬の呼び名である。

しかし、渋谷駅前の「忠犬ハチ公」のような犬もあり、特に恩を受けた主人は決して忘

れないなどの例は、古来その話の種が尽きない。且つて私は周作人という人の中国の小話集の中で、忠犬の話を読んで涙したことがある。野原に子供と遊びに行った犬が、春の日ざしに寝り込んでしまった子供と一緒に寝てしまった。ところが野火が起り、忽ち寝ている子供にと近づいてきた。驚いた犬は、近くの小川に飛び込んで毛をぬらし、子供の周りをころがりころがりして、草をしめらし終に子供を野火から守ったという話である。その犬は何度もそれを繰り返している内に疲れてしまい、野火の過ぎた後に、自分は焼け死んでいたというのである。

◇

犬についての話は限りがないが、この犬にちなんだこの年も、静かでよい年であつて欲しいと願うのは私だけではあるまい。犬は安産の守り神だとも言われる。七十年安産の年といわれるが、又この年は万国博の行われる年でもある。犬の安産にちなんで、今年も安らかに生れ出で、立派に育つことを切に祈つて止まない。

「小消息」の御法語に学ぶへい

まえが

法然上人のこの御法語は一紙小消息と申してもっとも親しまれているが、もと『法然上人行状絵図』（勅修御伝）によって、かように名づけられたのである。古くは親鸞上人の筆写された『西方指南抄』、望西楼道光上人の集録された『和語灯録』にも載せてあり、『法然上人絵』（弘願本）にはその後半が引かれている。和語灯録には「黒田の聖人へつかはす御文」となっており、黒田の聖人とはどういう人であったか義山上人によると、伊賀の国名張に住む上人であるとし、近時の学者の説で



—大正大学教授—

小沢 勇 貫

は、東大寺勸進職をつとめ、治承の年平家のために焼かれた東大寺を再興した俊乗房重源のこととされるが、しかしそれも定かではない。

浄土宗では五重伝法ごじゅうでんぽうといって、教えの精髓を五通の巻物として師弟相伝するが、この法語が初重の結びとなっていることから大切にせられ、ご遺誡『一枚起請文』いちまいきしょうもんとならんで二大法語として尊重し、わたくしども朝夕の勤行にも拝読している。また上人のご著作としては第一に『選択集』があげられる。古来ひろげたるが選択、すばめたるが一枚起請といわれ、広と略この両書が浄土のおしえの根本とされる重要性は今さら申すまでもない。一枚起請文は常随の弟子勢観房源智上人の懇請によって臨末に示された御法語で、ひたすら本願の念仏を信受する

ことをおしえられ、たしかに選択集について要中の要を
尽したものである。小消息もまた短篇のものであるが、
この方が一層浄土宗の要義をまとめて簡明に敘述された
ありがたい御法語であることは、椎尾法主も言われる通
りである。一枚起請文は「行について信を立」(善導大
師觀經疏)てるお導きであり、小消息は信仰を確立する
について、自らの反省から初めて、弥陀浄土をねがい、
念仏の一行に帰する意味を述べ、仏の本願に乗ずるには
如何にすべきか等、教義の大綱を示されたものと拝され
る。上人の御消息は多く、人びとのお尋ねに答えられて
念仏信仰などに及んでいるが、このご消息は黒田の聖人
につかわされたものとしても、内容はまことに浄土宗の
要義を、ひろく在世滅後の門徒に示された尊い御法語で
ある。

小消息について解説したものは古来幾種かあげられよ
うが、専門的にくわしいものとしては浄誉原澄上人(一
七五三—一八二〇)の『五重本末講義』の中に見えるも
の、また近くは増上寺椎尾法主の『宗要御法語小消息を
拝読して』(昭和十三年)があり、後者には進んだご見
解も示されて啓発されるところが多い。原文は勅修御伝
にしたがうこととし、正しくは七項あるいは十項に科段

を分けられるが、今は紙幅にもまかせて整いがたいこと
もあろう。

一、自らの道を求めて

末代の衆生を往生極楽の機にあてて見るに

末法まっぽうといわれて仏道のすたれた今の時代のわれわれ
が、果して阿弥陀さまの浄土に救っていたただけるのか、
浄土に救われる人間として適しているのか先ず自ら反省
して見なければならぬ。かように冒頭されている。仏
教の言葉で機法一致とか機教相応などという。機とは教
えの受け手、その能力である。教えと人間の機根とよく
相応し、つりあわなければならぬということ、これは
宗教を考える場合根本の問題であろう。教えがいかに勝
れていても、実行し実証しがたいものでは、機法一致と
いえない。いたずらに理想の高きにとらわれて、自分を
見ることが忘れていたのでは、道を修する上の違算しか
ない。

およそ法然上人以前の諸宗では、教えの優劣浅深をた
がいにあげつらい、人間の能力を考えることに欠けてい

た。上人は浄土宗を開かれるまで三十余年、仏教の学問と修行に半生をかけられた。かつては比叡の学林で智慧第一とも称せられた天才であつて、なお自らは三学の器でないと思はれた。戒律を持ち、禪定を得、さとり智慧をきわめるなどわが分でないと思はれ、自らを投げ出されてゐる。たしかに「機にあてて見る」という言葉は、以前の仏教を大きく転回させるほど重要な意義をもっているのである。自らの道を求め凡夫性を見つめて、やがて新たな民衆仏教の発見となつたのである。後に大原の勝林院で談義の行われた際「法門は互角の論なりしかども、機根くらべには源空勝ちたりき」と語っておられる。

人間の機根能力ということと、更にまた「末代の衆生」として自らふかく反省してみるものである。末法という時代への省察、教えもまた時代に相応するものでなければならぬ。

仏教には、釈尊がお亡くなりになつて時代が降るにしたがい、大聖の人格的感化が薄らいで仏の教えが実行されなくなるとする歴史観がある。その変遷を大集経には五百年ずつ五期に区分し、大乘同性経などには正法・像法・末法の三時として、これも仏の予言として説かれてゐる。唐の慈恩らの説明によると、正法時とは教と行と

証、仏のおしえと、教えによる修行と、行によつてさとりを得ること、この三がそなわつた時代で釈尊の入滅から五百年をいう。像法時は教えと行とあつて、さとりを得るものが無くなる時代で次の一千年をいう。末法時はただ教えのみあつて、行と証とがまったく廃れる時代が来るといふのである。それは人間の心の歴史ともいえるが、由来教界の推移を説いて、仏教徒の自覚をよび起さうとしたもので、時代区分が本意ではない。阿彌陀經には五濁悪世という。時代は濁り戦争や疫病が多く（劫濁）、思想悪化し（見濁）、悪徳がはびこり（煩惱濁）、人間の資質は落ち（衆生濁）、寿命が短くなる（命濁）、道綽禪師（五六二―六四五）は時代が末法に入り、まのあたり五濁に満ちた悪世だとして、これに相応する教えとして浄土教を宣揚した先覚者であつた。平安末期動乱の世に出られて、末法の世相を痛感し、現世のさとりが至難であることを、身をもつて体験された法然上人は、禪師の説にも共鳴するところあつて、新たな道を見出され、浄土宗の開立となつたのである。

私も末代の衆生として、果してみ仏の大悲に救われ浄土往生がかなうかどうか、その機にあてはめ深く反省して、決定の信心を立てることを教えられたのである。



法然上人二十五霊場をめぐりて

第六回

村 上 博 了

宗祖円光大師法然上人廿五霊場結願は京都東山浄土宗
総本山華頂山大谷寺知恩院である。同院にはかずかずの
名所が少くない。

その一に大殿（御影堂）廻廊の驚張り大廊下がある。
児童生徒達までよく知っている。かように人口にのぼる
ことも、その故なしといえない。

知恩院は宗祖円光大師法然上人随一の霊場である。上
人は無官の一沙門にすぎないけれども、当時の最高主権
者三朝廷の師範と仰がれたお方である。その人徳と仏教
の精華浄土宗開拓の主人公であり、口称念仏こそ阿弥陀
如来の御本願と覚知し、誰でもお念仏する時には大功徳

を成じ、その当人の往生は勿論、その余徳は志す精霊の
追善となることを、身を以って庶人に示めされた、いわ
ば第二の釈尊と申してもよい一大法器の仁^{ひと}であった。次
に東山山麓天下の景勝地にあり、隣りに円山公園あつ
て、四季都人遊行地にある。第三は諸堂便利の地にあり
而も堂々たるその輪換の美は天下周知の事実である。

諸堂の一端をあげれば、三門 御影堂（本堂又は大
殿）、集会堂（千畳敷といわれる）、唐門、大小方丈、権
現堂、大小庫裡、学問所、経蔵、大鐘楼、勢至堂、御廟
堂、小鐘楼、宝庫、奥蔵、調菜所、黒門等あつて、いづ
れも文化財であり、所蔵の宝物文化財も少なからず所謂
日本文化の宝庫である。同院誌要には、

現諸堂宇は徳川三代盛時に属し、巨万の資材と幾多の人工とを惜まざりしを以て、規模宏壮に輪換の美を恣にし、闔国多く、その比を見ざるべし

と、古い時代から天下第一の殿堂であつた。境内又惣坪四万四千五百三十坪奥深く高く市街を一望下に収められる。

二

(一)

ときは承安五年春三月花の季節、上人は、浄土宗を開宗されると、四明巖洞（叡山黒谷）を出て、洛西広谷の地に移り住された。いくほどもなく東山去水のほとり、静かなる地に広谷の庵室をうつされたのである。その土地は東西三丈あまり南北十丈ほどであつた。

当時上人の住坊三所にあり、一は西山広谷の庵室を移したものの、これを中ノ坊（又は二つ岩禅坊）といい今の御影堂の地に当る。二を東の新坊（又は松下の禅坊）といい今の大鐘楼堂の東北に当る。三を西の旧坊（又は清水禅坊）といい、今の三門西南の地にあつた。

上人は、中の坊に常に住居されて、東西の二坊を門弟の宿舎にあてられたいたって簡素な生活であつたのである。ここに注目すべきことは、その拠点が既教団のよう

に山岳等でなく、市民生活地域に在つたことである。經に必有仏性といい、平等無差別とあるように、市民と區別しない、男女老若を問わない。勅修御伝にたづねいたるものあれば、浄土の法をのべ、念仏の行をすすめらる

という、念仏信仰に徹された生活であつた。

しかしその教法は時機相応したものであり、市民の要望に答えたものであつたから、その教は、

化導日にしたがひて、さかりに、念仏に帰する者、雲霞のごとし

と伝えられている。

ついに、その誉は一朝に充ち、益四海にあまねしと、念仏の声は日本国津々浦々にまでみちた。上人は「これ弥陀の一教、わが国に縁ふかく、念仏の勝行、末法に相応する故なるべし」と仰せられている。ここに上人の一世に秀でたる一大法器の片りんを見る。又上人には数多の弟子がいた事實は、人格円満、氣宇宏大で本当の如来さまのような慈悲智徳円満なお方であつたことを物語る。

(二)

勅免入洛の上人は、慈鎮和尚の好意によって、東山大

谷禪房に、おはいりになった。伝えきいた道俗男女、その夜の中に一千余人もつめかけた。当時の人口からすれば大変な群参で大人気であったことが判る。上人はなんとなくお疲れ気味と拝されたのである。

年が改たまつて建暦二年正月二日頃から、二根明利なこと昔のようになった。見聞の人々随喜し有難いことだと話合つたのである。

毎日、人生の一大事往生について講話があり、高声念仏もたえず、お休みの時にも、念仏申される様子で舌と唇とがうごいていた。三日のある時、側に仕へていたる一弟子が「今度の御往生は決定でありますか」と伺うたのである。上人は、

我もと極樂にあつた身なれば、定めてかへり行くならん
と答えられた。

十一日辰の時、上人床をはなれて、高声念仏せられる。聞く人々皆有難いことと涙にくれた。上人仰せられるは、

弥陀仏の、きたり給へるなり。お念仏を申せば一人として往生せずといふことない

と告げられた。巳時、弟子達臨終行儀として三尺の阿弥

陀仏像を迎え病床の右に安置し、拝みまいらせますかと伺うたのである。上人は、指で空を示し、

この仏の外に又仏します

と仰せられた。又弟子たちが、仏のみ手に五色の糸をとりつけて、いざとりましようとするめられる、上人はかようことは、これつねの人の儀式なり、わが身におきては、いまだ必ずしもしからずと仰せられる。

二十日巳時、上人坊の上に紫雲たなびき、中に円形の雲あり、五色にかがやいていた。上人は弟子の尋ねに答えてわが往生は、一切衆生のためなり、念仏の信をとらしめんために瑞相を現するなりといわれたのである。

二十三日から、上人お念仏を申される時、高声念仏不退となった。一枚起請を述作せられて御滅後門弟のまよいを匡されたのである。二十四日午の時となった。御伝には、

紫雲おほきにたなびく。西山の水の尾の峯に、炭やくともがら十余人、これを見て来てつげ申。広隆寺より下向しける禪尼も、途中にしてこれをみて、たづねきたりて、このよしを申す。見聞の諸人随喜せずといふ

ことなし

と伝え、上人の御臨終近いことを誰とはなしに知れ渡つていたのである。又御伝には、

二十四日の酉刻より、二十五日の巳時にいたるまでは、高声体をせめて無間なり。弟子五六人、かわるがわる助音するに、助音は窮屈すといへども、老邁病悩の身おこたり給はず、未曾有のことなり。

と伝え、御念仏の声は東山にこだましたのであった。群集の道俗、感涙をもよほさずといふことなしという状態であつた。

廿五日の午の刻頃より、御念仏の声もようやくかすかとなり、高声念仏は時折り交る、まさしく上人の御臨終と拝された。弟子達によつて、

慈覚大師の九条の袈裟をかけ、頭北面西合掌されて、光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨と唱いたまい、ねぶるように円寂された。お念仏の音声がきこえなくなつた時も、尚唇舌を動かして念仏を申され給事十余返なりと伝えられる。上人の「面色ことにあざやかに、形容笑めるに似たり」という。春秋八十才であつた。御伝には寿算のひとしきのみにあらず。支干又ともに壬申なり。といひ、大聖釈尊と円寂の年令、干支とも同じである、

豈奇特にあらずやと舜昌はいうている。

今上人往生せられたので、門弟たち相寄り念仏を申しつつ、石の唐櫃にかまへて、おさめられた。去年十二月、大谷禪房の「東の岸の上に西はれた勝地あり」て領主地券契等をそえて寄進された、此の地が上人の廟所となつたのである。

三

御伝によつて、上人御往生の様子的一端をお伝え申したい。

又上人御往生の前後に、諸人の瑞夢これ多し。四条京極の箔師真清は、正月十九日の夜夢に、東山の法然上人の禪房の上に、紫雲そびいけり。人ありてこれ往生の雲なりといふと見る。次の日巳時に、紫雲かの房の上をおほへり。処々にこれを見る。夢と符合す。弟子念あみだぶは、同廿三日の夜、上人往生の紫雲、ならびにしろき光り虚空にみち、異香をかぐと見る。三条小川の倍從信賢が後家の養女、ならびに仁和寺の比丘尼西妙は、廿四日の夜、明日午時に往生し給べしと見て、驚き来りて終焉にあふ。花園准後の侍女参河局は廿四日の夜の夢に、上人の住房を見れば、四方に錦の帳をたれたり。色あざやかにして、けぶり又みちみて

り。よくよくこれを見れば、煙にはあらず即ち紫雲なり。上人すでに往生し給へるかとおぼえてさめぬ。花山院右大臣家の青侍江内ならびに八幡の住人右馬允時広が子息金剛丸は、同夜に上人往生の儀を見て、廿五日の早旦に人々に語る。天王寺の松殿法印静尊は廿五日午剋に、脇息によりかかりて休息し給へる夢に、上人往生の時、車のわのごとくなる八輻輪やうりんの八方の先ごとに、雑色の幡はたをかけて、東より西に行くに、金色の光り四方をてらし、天地にみちみちて、日光映蔽えいへいせらると見たまふ。一切経谷の袈裟王丸は、廿五日の夜、童子玉の幡はたをさして、千万の僧衆香炉をとり、上人囲繞ゐりょうして西に行き給ふと見る。門弟隆寛律師は、初七日にあたりて、一昼夜の念仏をつとむるに、一人の僧来りて、上人ははや往生伝にいり給へりと告ぐと見る。すべて諸人の夢想多しといへども、しげきによりて、つぶさにしるさず 云云

とあって、上人の往生は時の人々の信心信仰心に光明を点じたのである。知恩院の御詠歌は

草も木も 枯れたる野辺に ただひとり

松のみ残る みだの本願

誠に味合深い有難いおうたではないか。(終)

伝統の国イギリスでは、今中等教育における宗教教育にひとつの転機をむかえようとしているとのこと、それは週二―四時間の授業、毎朝三十分程度の礼拝が行なわれているが、特に礼拝はまったく形式化し学校生活全体から完全に浮きあがった存在になっていることです。こうした現状打破のため礼拝を学校生活全体に結びつけ、生徒が積極的に参加できるよう、音楽・ダンス・美術・文学などを組みこんだ宗教行事化の方向へもっていくことが最善の道と考えられてきている由。

また教科としての宗教教育では単にキリスト教の教義を教えるのではなく、道徳や人間の問題と考え、さらには文化の一部として宗教をとらえる機会に活用すべきだともしております。

こうした現状から変りつつある老大国イギリスの教育の苦悩の一端をうかがうことができます。これを日本におきかえるならば、やはり同様の点が指摘できるのではないのでしょうか。伝統の中にはそれなりの良さが充ちあふれていることはいうまでもありません。けれど生きた宗教としての活路は人々の中にあることを再考すべきでしょう。



川 上 法 俊

(東京都文京区在住)

地藏さまの頭は何故円い〈上〉

村のはずれのお地藏さまは何時もにこにこ見てござる、と童達と遊んでくださったたり、どっちに行ったら楽だい、黙っていてはわからない、と股旅に道を尋ねられたり、御月見団子を召上ったり、とにかく種々な菩薩がありながら庶民に親しまれている菩薩としては、まず観音さまと地藏さまが一番でしょう。

その理由はこの二人の菩薩は大悲闡提^{せんだい}という方の代表とせられてゐるからです。やさしくいいますと、仏さまになる力を充分お持ちでありながら、仏さまは位が高すぎて時としては下を救済するのに不便な時がありますので、下化衆生のためにわざと自分から位を落して仏さまにならず、菩薩の位に止って仏縁薄い人々を救済しようとする方々なのです。

浄土宗の御法事に参りますと、三尊礼讃という唱みたいな

ものを唱う時が多いですね。阿弥陀仏観音勢至両菩薩を讃える唱です。その中の観音礼讃の中に、已得菩提捨不証^{いとくぼだいしやふしやう}、すなわちその力を已^{すで}に有しながら成仏なさらぬということ、そして、一切五道内身^{ごう}中、すなわち一切の社会に身をあらわして救済なさるといふ意味のところがあります。(一切社会は普通六道能化等といつて、地獄餓鬼畜生修羅人天ですが、時として修羅を略して鬼子一種に入れるために五道としたのでしょう。)

また次でながら末句の、普摂有縁帰本国のことも大切な事なのです。観音さま殊に聖観音は頭に阿弥陀さまを戴いています。観音さまは確かに阿弥陀さまの一番家老で本国は西方浄土なのですが、特別な願がありましたして観音さまの救う人は必ずしも西方往生を望む人々ばかりでなく、娑婆世界で修行

しようとする人々、あるいは他の浄土に往生しようとする人々をも援助します。

ですから観音さまの御経は沢山あるのですが、普通観音経といわれているものは法華経中の普門品で、三十三応身の事もこの御経に出てきます。法華経は御存知の通り御釈迦様が主人公の御経で、ここに登場する観音さまは釈迦仏の御手伝もする観音さまなのです。ですから娑婆世界に別荘もおもちで、普陀落山（中国の舟山列島）といえます。華嚴ノ滝の日光も本来は観音さまの霊場で、二荒山が音続きとなり、更に二荒^{にっく}日光に変わってしまったのです。

このように何の経にも何の宗にも非常に融和的な方ですから、浅草寺の観音さまなど門徒の若旦那と日蓮宗の芸者が仲良くなってしまったというように時に仲人に使われたわけです。今日は信仰のルールがまるで乱れていますから、少し衰微していますが、信仰ルール復活があればこうしたお参りも、また復興すると思います。

とにかく末句は誰をも助け、その中に西方有縁の衆生は普く西方に導くという意味です。ですから一面夾量な門徒信仰のひどい人などは信仰が乱れるとして、親鸞は観音の生れ変り等いわれながら、阿弥陀仏の一番家老の観音さまさえ敬遠

するのです。ですから門徒の仏壇の御本尊は必ず阿弥陀さま一人で、観音勢至がつきそっていません。

地藏さまはこの観音さまと対抗して、やはり大悲闡提の代表なのです。そうしてこの地藏さまは観音さまより、更に一層位を低く取られるのが特徴なのです。いずれの浄土にもお住みにならず、種々な世界、殊に娑婆世界に有縁で、一人の仏さまの入滅から次の仏さまの成道迄の間の苦の衆生を救い、天に生れますことを願っています。今でいえば釈迦仏入滅より次の五十六億七千万歳後の弥陀仏の出現迄の間の六道能化をなさるわけです。そうして観音さまは三十三応身といいますが、地藏さまは四十二応身の変化で、衆生の中に現じて苦の衆生を救います。ただしまたここに大きな特徴が三つあり、観音さまと相違があります。

四誓願と四十八願の差別は御存知ですね。四誓願すなわち、

衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願断

法門無尽誓願知 無上菩提誓願証

というのは何の菩薩でも仏でも共通な誓願なのですが、その具体的な方法としての願は諸仏諸菩薩みな異っておりま

す。例えばこれ四十八願の如きは阿弥陀仏独特の願で、その中第十八願が特に他の仏さま達と異なる故本願といわれま

す。薬師仏は十二願、釈迦仏は五百願の多数ですが、要は御釈迦さまは穢土成仏といって、阿弥陀さまのような無有衆苦但受極楽というような浄土を建立せず、苦の娑婆世界内で成仏し、そこをこのまま靈鷲山浄土とされようとなされ、そのためにはいかなる難行苦行も辞せられなかったわけでありま
す。御釈迦さまと弥勒菩薩は昔一緒に発菩提心（仏さまになろうと誓うこと）したのですが、難行苦行を嫌われなかった釈迦が一足お先になったということは種々の経に出ております。

このように菩薩方にもみな別願というものがあるわけなのです。（阿弥陀仏の四十八願も実は法蔵菩薩の時におたてになったもので、皆な菩薩の時に立てて成仏の時、その願も成就したわけなのです）さてそこです。

お地藏さまの姿を拝見している時、他の菩薩方と何か違う所があるのに気がきませんか。観音・勢至・弥勒・虚空蔵・文珠・普賢その他一切の諸菩薩とどこか違いますか。性別ではありません。観世音三十三応身といわれ、白ネ観音や魚籃観音はあまりお美しいので女性とまちがわれますが、（支那でも俗信では女性とまちがわれ、西遊記の中でも孫悟空がこのジャジャ馬女などと罵っている所もあります）菩薩は元来みな憂婆塞（男性仏教在家）の姿ですから、もとより男

性で聖観音を見ればおわりの通りドジョウひげをおはやしです。ただ一相馬郎婦観音だけが化身相で女性を示しています。そう聖天さまの雌象もそうでした。ただしこうした時はすべて権化相の時のみで本相ではありません。嬢句梨童女の蛇を持ってゐるのなどもそうです。年令別でもありません。童女成仏の如く、特に明言された人は別としてみな成年男子です。ですから森の石松が「お前さんくらいわからねえ人はない。大人かと思えば赤いよだれかけなどかけている」となるわけでは

半分いい終りましたからお分りになったことと思います。菩薩は原則成年男子仏教教徒ですから、その証因はみな天冠をつけ、瓔珞（冠のヒラヒラ）をさげています。ところがお地藏さま一人だけは頭が円いのです。剃っており、坊さんの姿をしています。何故でしょう。別に烏を止めて三島女郎衆になるためでも、播磨屋橋で竿を買おうというのでもありません。

実は大変むずかしい願があるのです。大乘小乗の別ということとはよく聞きますね。大乘とは誰でも仏さまになれるということです。ところがなれるといっても決してただなれるわけではなく、それ相應の修行をしなければなりません。もし

何もしないで成仏できるものなら浄土教などというものは必要ありません。浄土宗ではまず第一に二種の深心ということが必要になります。自分のような非力な奴はただでは助かりこないという機の深心、こんなくだらぬ自分でもお念仏すれば阿弥陀さまは救って下さるという法の深心、この二つが基調になります。

それを更に廻向発願心といって、できないながらも良いことをして阿弥陀さまに御氣に入ろう、娑婆世界主お釈迦さまにも義理をたてようと努力するわけですが、それをとんだはきちがえて口先で念仏さえしていればどんな悪事をしても無罪で往生できるというような考え方が出がちです。本願ばかりといわれるのがそれです。聖道門の場合でも同じで、一切は諸法実相だから、空だから、平等だから何をしてても罪ではない。覺ったら一切同じだというような所謂邪空解の人々が出がちです。一切平等なら悪いことをせず良いことをしても平等のはずですが、必ず悪いことの方を好んでするからこの人々は不思議です。ですから平田篤胤は坊主に煎餅と金平糖（この頃は貴重品）を一緒に出せば平等の筈なのに必ず金平糖に手を出すと罵っています。

このような人々は必ず真面目に戒律を守ったり、善いこと

をしようとする人々を彼奴はバカ扱いをし、時々は迫害さえ加えます。そのあさましい姿をうれいて、お地藏さまは戒律の堅い声聞の姿を取られたのです。もとより御自身は大菩薩であられながらそのような姿、菩薩像あるいは声聞形という相を示されたわけであり、小乗の理すらわからず自称大乘するものは魔種であるときめつけています。その故にお地藏さまは自称大乘ばかりで、真面目な修行をする者を迫害する者を罰しようとの御誓いがあるわけです。これが第一です。

続いてこれにも関係しますが、お地藏さまは救済者の側の方でありながら一人二役で閻魔さまを勤めることです。その四十二応身の中でも唱っております。一面のやさしは賽の河原に子供等をいたわりながら、あまりわからぬ奴には閻魔さまとして囚人を獄卒にひきわたすわけであります。地藏と閻魔が両方並んでいるお寺が沢山あるでしょう。このためです。よく聖天だますと七代たたるという諺がありますが、地藏の顔も三度という諺も記憶して下さい。しかしこんな事をいうと怖くなって近づかない人が出て困りますからお断りしておきます。本来救済の方が本職なのですから、余程の悪事を働く人でないかぎり大丈夫ですし、また本心悪かったと思う人が懺悔すれば、よろこんでその懺悔を受け、転重軽置（重い罪を軽く受けさせる）させてくれます。



念仏生活

第一回

—五重相伝のお話し—

藤井 実応

一、五重とは何か

(一) 五重相伝会

五重相伝は略して五重と申していますが、わが浄土宗においては授戒会と共に二大法要の一であります。それで一定の期間、五日間とか七日間に浄土宗にて最も大切な念仏の教えを正しく伝受する法会を五重相伝会と申します。その法会中は起居寢食を共にし、み教えを聞き、念仏礼拝を実際に修するをたてまえとし、その信仰を身につけようとするのであります。そしてその相伝をうけると、そこではじめて浄土宗の信者となったという自覚が生れ、その信仰相続によって只今から心安らかな明るい力強い生活を営むことができるように

なるのであります。

浄土教の熱心な所では、二十代、三十代で五重をうけます。結婚前に一度うける、もし結婚前にうけていない人は結婚後なるべく早く受けることにする、五重をうけていない人は、その部落町村のいろいろの役員に推薦されない習わしになっっている所もあります。その期間中その寺に泊って全期間、文字通り寢食を共にして行われるところもあります。「老い来って始めて道を学ぶということなかれ、古墳の多くは是れ少年の人なり」と古詩にもあります。早くその機縁を得て五重をうけられる人は幸せであります。

(二) 五重相伝の意義と内容

さてその五重相伝の意義内容を簡単に説明しておきましょう。

人として、本当の自己にめざめ、真に生きがいある生き方、即ち現在より未来永遠に真実に生きゆく道を、明らかに開き示したもうたわが浄土宗祖法然上人のみ教えを、祖師方の著書を通して五つ重なりに重ねあわして、ハッキリとこのみ教えの肝心を伝えようとするのが五重相伝であります。

私共は真実を求めております。尊き人間の命をうけて、この人生を導く意義あるよう全うしたいと願わずにおれません。生きがいある生活、よろこびの生活、真のしあわせの生活を望んでおります。それでは如何に生きてゆけばよいのでしょうか。しかも現実はいたるところ苦悩にみちています。そして人は生きていく以上、必ず死する時が来ます。この苦悩より解脱し、生死の問題を解決し、不生不滅の永遠の生命にめざめて、今日より光明の生活に入り未来永遠に救われる道を明にするのが法然上人のお開き下された念仏の仏えであります。それを順序を追うて明にしようとするのであります。

(三) 五重の名目

初重	往生記	元祖法然上人作
二重	授手印	二祖聖光上人作
三重	領解抄	三祖良忠上人作
四重	決 答	三祖良忠上人作

五重 (口授心伝) 曇鸞大師伝

(往生論註の十念伝)

初重は善導大師から法然上人(和順大師)が御相伝になったこと、

二重は法然上人から聖光上人(正宗国師)が御相伝になったこと、

三重は聖光上人から良忠上人(記主禪師)が御相伝になったこと、

四重は良忠上人が当時の人々に納得のゆくようにお残しになったこと、

五重はこれまでにずっと印度・中国・日本へと伝わって参った仏祖相伝と申すこと、

以上五通りのことが代々相伝の重なることで、三国(印度・中国・日本)の浄土教の祖師方から異途なく伝えられた御法です。右の五法の相伝によって法の灯は私共の心に伝えられるので五重相伝と申します。

(四) 受者の心得

五重相伝を受けられる人を受者と申しますが、受者はその期間中は五日間なり七日間、休まぬように心がけます。五重の時の勧誡(お話し)は念仏の教えを順序正して、組織的に述べることになっているからです。そして次の如き道場の清

規を守るように心得ます。

道場清規

- 一、篤く三宝を敬うこと
- 二、内外清浄に、和よく敬いあうこと
- 三、今度の五重相伝は私の生涯に只一度限りと心得てはげむこと
- 四、休みの時間も雑談などせず、お念仏を離れぬよう心得ること
- 五、おつとめ、礼拝、念仏、食事等すべて係の方の指図を守ることに

信仰はこのような念仏の実践生活を通して身につくものなのであります。

(五) 五重のはじまり

元祖法然上人の滅後一八二年、明德四年（一三九三）十二月、浄土宗第七祖了誉聖阿上人（東京文京区伝通院開山）が浄土宗の要旨を五重として編制し、その各々に口訣（師が弟子に口づから奥義を伝える）を配して、五十五箇条の伝目を定め、これを第八祖西誉聖聡上人（東京増上寺開山）に附法相伝されたのが五重のはじまりで、これは出家相承—僧侶にのみ伝えるものであります。

その頃は禅宗が盛んで、臨済宗の虎関師錬（一三四六寂）

が浄土宗は寓宗であると擯斥し、同宗の夢窓国師（一三五—寂）が浄土教は小乗だと嘲笑したりしましたので、西誉上人は浄土宗は究竟大乘の教えであり、独立の宗教なることを明らかにするため、この五重相伝を創めなされたと伝えられます。その当初は学行のすぐれている学徒を選んで、特に相伝するを例としました。その頃の相伝には、百日の前加行、二十一日の正修行、七日間の正伝法、日々礼拝三千礼であったといわれます。今は日数も二十一日となり制度も変わってきましたが、宗侶たるものは一度は必ずこのみ教えの相承をうけることになっております。

(六) 化他五重の起源

化他五重というのは在家の方に相伝する五重を申すのであります。

徳川家康公の六世の祖、岡崎の城主松平親忠公は浄土教篤信の人でしたが、はじめ自らの職務と信仰との矛盾に悩み、それが解決を求め、且はこの尊きみ法を在家信徒にも及ぼされたいものと、その菩提寺の岡崎の大樹寺開山勢誉愚底上人に懇請して、七日間精進潔斎して相伝を承けられたのが化他五重の起源であります。

その後徳川時代に「元和法度」で一時、在家への五重は禁ぜられたことがありますが、列祖上人方の尽力によってまも

なく許され爾後今日まで数百年、宗教的に洗練された方法をもつて五重が行なわれているのであります。

二、初重 往生記 元祖法然上人作

初めに伝燈分

(五重のみ教えを明にするのに、伝燈文といつて初めに仏法をうけ伝える法脈、由来を明かし次に正説分として正しくそのみ教えの要を説くことになっています)

法然上人はわが国に伝わった仏教を真の国民の仏教となし、誰でも平等に救われゆく道を開いた偉大な宗教家であられます。

法然上人の時代は平安の末期から鎌倉の初期に移る変化のはげしき時代で、政治・経済・社会思想等あらゆる方面に大きな変革が行われ、保元の乱・平治の乱、次いで源平の合戦となり、やがて鎌倉幕府が成立する時代で、生活は不安で、人心は極度に動揺した時代であります。その時上人は南無阿彌陀仏の法門を開いて人々に大きな光明を与え、生きた信仰としての仏教をお弘め下さいました。

上人は長承二年(一一三三)四月七日、岡山県久米郡久米南町(津山線誕生寺駅近く)に生れ、父は久米の押領使、漆

時国のときくにという武士、母は秦氏はたうじと申された。幼名は勢至丸、九才きゅうさいの時父の定国は定明さだあきらという者の怨をうけて、夜討にあい亡くなるのですが、その臨終に九才の勢至丸を枕許に呼びよせ「仇を討つなよ、みんなの救われる道を求めてくれ」との遺言でありました。敵味方を忘れ、怨親平等に平和の世界に生きゆく念仏の教えが開かれる前に、この父の偉大な遺言がありました。後年、上人は「父の遺言忘れがたくして」と度々述懐せられています。

暫く母方の叔父にあたる同国菩提寺の観覺の所に居ましたが、十三才、当時の仏教界の中心であった叡山に登り、源光阿闍梨、次いで皇円阿闍梨に学び、十五才戒壇院で出家授戒し、十八才叡山西塔黒谷の叡空上人をたずね、四十三才に至るまで研学修行をつづけられました。上人生涯の呼び名となった法然房という号と源空という名は、この叡空上人から授けられたのであります。二十四才嵯峨の清涼寺に七日間こもって仏道の成就を祈り、次いで奈良や京都の仏教の専門の大家を訪問して、誰でもが救われる道、真実に生きゆく道について教えを乞うたが、何れも「知恵第一の法然房よ」とほめられただけで、求むる道は明らかとならず、再び黒谷に帰って、一切経をくりかえし、くりかえし閲覽されましたが、遂に承安五年(一一七五)三月、四十三才の時、恵心僧都の

『往生要集』の手引で唐の善導大師の『観経疏』によって、はじめて「いかなる愚かな人、貧しき人、苦しめる人、悩める人も南無阿弥陀仏と申すことによって、真実に共に生きゆくことができる、それは阿弥陀仏の本願によるからである」との善導大師の敬意を確信体得されて、それから一切の余行を捨てて、念仏一行を専ら修せられることになりました。その時の上人のよろこびはいかばかりでありましたでしょうか。三十年にわたる苦心研学修行はむくいられ、今まで雲に覆われていた釈尊の真髓がここにあらわれ、一切の人々の明るく生きゆく光はここに輝き出たのであります。（この年を浄土開宗とし、昭和四十九年が八百年にあたります）

（一）経巻相承　かくして法然上人は法を善導大師より経巻を通して法を承けられたのであります。善導大師の本願念仏もその根本は釈尊のみ教えで、それが印度・中国と、お祖師方を通して法然上人にと歴史的に法が伝わって参りました。これを経巻相承と申します。

（二）直授相承　善導大師は法然上人よりも五百年も前の方、時も国も異にしているのですが、上人は大師を阿弥陀仏の化身と渴仰され、至心念仏し、念仏三昧中に感應道交、大師から直接に法を授けられました。これは直授相承といい、主体的な信仰体験上の相承であります。

かくして上人は黒谷を去って京都に出られ、生涯を念仏の弘通にささげられました。その殆んどは東山吉水の庵室（今の知恩院の辺り）にお住みになりましたが、そのみ教えは皇室より藤原貴族、源平の武士、庶民、強盗、遊女に至るあらゆる階層に浸み入り、立派なたくさん弟子を教養されました。然るに南都北嶺の弾圧をうけ、七十五才の時、弟子の事件がきっかけとなり、四国に遠流せられることになりました。

「田舎に赴いて念仏の教えを伝える機縁が与えられたのは朝恩である」

と流罪を恩寵とうけとり、また弟子の忠告に対しては「たとえ死刑に行わるるともこの尊い念仏の尊き説かずにはおれぬ」と申されました。七十九才京都に帰ることが許され、十一月旧居大谷の禅房に死り、翌建暦二年（一二二二）正月、病いを得

「念仏の声するところわが遺跡なり」

という言葉を残し、二十五日、八十才で浄土へお帰りになりました。初重のみ教えはこの宗祖ののこしおかれた『往生記』により、念仏の信仰を得んとする第一の心得を頂くのであります。

物	聖
語	典

カピラ城の滅亡(1)



つる た
たん せん

お釈迦さまが、鹿野苑ろくやおんにいられた時のことでした。当時、コーサラ国はマカダ国と共に、インドでは最も有力な国で互に覇を争っていました。コーサラ国は先王の梵授王の時から急に国力を増しハシノク王の時には、隣国の迦戸かあしをも併せてインドの最強国となっていました。

お釈迦さまの生れられた釈迦族のカピラ城は、ヒマラヤ山麓の高台地にあつて国土も至つて狭い小さい部族国家で、そのため西の隣国のコーサラ国から絶えず圧迫を受けていました。しかし釈迦族は国は小さくとも、太陽の裔えいと称して、尊貴な種族であることを誇っていました。又、末羅まらや毘舍離べいしゃりと共に、美人の多いので有名でありました。

ハシノク王は王位に即つきますと、名族の釈迦族から王

妃を迎えたいと思ひカピラ城へ婚姻を申し込みました。

「わたしは、是非とも王の姫を王妃に迎えたいと思っています。嫁して下さい、この上もなくよろこばしいことです。そうなれば両国は、いっそう仲よくいたしましょう。しかし若しこのことを承諾して下さいならぬ時には、或は力を以つて逼せめるかも知れませぬ」

王は国力の強大をたのんで、表面はねんごろであるが、その実、威嚇いこくあるような態度で命令的に申し込んで来ました。

その頃、釈迦族はお釈迦さまが出家されていましたが、お釈迦さまの徒弟にあたる摩訶男が王となっていました。摩訶男は情愛の強い温厚な王で、お釈迦さまを深く尊び、又、仏教の教団にも何かにつけて援助していま

した。

カピラ城では、ハシノク王の申し出を受けるとよろこぶどころか、却って当惑顔でした。釈迦族は太陽の後裔でインドの最高の血統の民族であると、日頃自分等の民族の尊さを誇りにしていましたから、昔からの習慣に従って同族結婚の習慣を守り、他の民族との婚姻は一切しなかったのです。ですからカピラ城では、初めから議論は二つに分れてしまいました。

「われわれは太陽の裔の誇りの高い血統である。たとえハシノク王の申し込みとは申せ、す性の低い王と親族となる必要があるか」

憤慨して強い意見を吐く大臣もいました。

「しかし、どんな方法を設けて、あの日頃から兇暴の噂の高い王の怒りを買わないで、わが国のふるい習慣に従うことの出来る方法があるか」

そう考えるとはたと困り、いろいろと知恵をしぼって相談しました。大臣等は、王女を与えるか与えないかで賛否に意見が分れて、容易に決定しませんでした。

その時、王の摩訶男は、

「おんみらは、王の申し込みに憤慨してはならぬ。かの王は生れつき短気であるし、今、威勢は甚だ盛んであ

る。万一王の軍勢が迫めよせて来たならば、我が国の境界はまたたく破られるであろう。わたしは自ら赴いて、王と親しく会見してよく事情を話したい」

となだめました。

摩訶男には、ヴァーサバーという世に稀れな美しい王女がありました。水ぎわだった美貌の少女でしたが、しかしいたって身分の低い召し使の女に生れたのでした。

摩訶男はこの美しい王女を美々しく着飾らせ、立派な車に乗せ大勢の家来に守らせて、ハシノク王の王宮へ行きました。ハシノク王は礼儀を厚くして王女を迎えて王妃といたしました。王には、この他に有名な末利夫人がありました。末利夫人は、花園の管理人の娘で身分の低い生れでしたが、お釈迦さまを尊崇し、又、王を仏が教をきくように導いた賢夫人でした。尚この他に、容儀の美しい行雨という夫人もいました。

やがてヴァーサバーに王子が生まれ、るり（瑠璃）王子と名づけられました。王子には先に生れた異母兄の祇多太子がいましたので、るり王子はつまり第二王子でした。

ハシノク王はりりしくて愛くるしいるり王子を目を細くして可愛がり、少しの間でも自分の傍からはなさない

ほどでした。やがて王子が八才になりましたので、王は射術を学ばそうと考えました。いろいろな武芸の中でも弓を射ることは最も大切であると思ったからです。その当時、射術に於ては、釈迦族が第一番に勝れているとの評判でした。なにしろ釈迦族は小国であつたからでしようが、武士は日頃から武芸を練り、殊に弓を射ることに秀でていました。お釈迦さまも未だシツタルタと申されて太子であつた頃、射術にすぐれていましたが、摩訶男も名人でした。ウパナンダというお釈迦さまの弟子などは出家してからも、マカダ国の大臣や將軍など五百人に弓術の指南をしていたといわれています。

王はるり王子に大臣の子供等をつきそわし、大象の背に乗せ侍従の好古を初め多くの兵士に守らせてカピラ城へ送り届けました。こうしてるり王子は、お供して来た少年やカピラ城の大臣等の子供等と共においさんに当る摩訶男について弓術を学ぶこととなりました。それから毎日射的場で弓術のはげしい練習が初まりましたが、るり王子の腕がめきめきあがつて、摩訶男も舌を巻くほどでした。

その頃、カピラ城の一角に新しい立派な講堂が出来上っていました。このお堂は、お釈迦さまを招いて説法さ

れるのを、そこできくために新築されたのでした。お堂の内部は色んな絵画も画かれ、天の宮殿を思わせるように目の覚めるほどでした。床には美しい敷物がしきつめられ、お釈迦さまが説法される獅子座もありますし、あちらこちらに五色のぬのばたやきぬのたれがさもかけられていました。香がたかれてよい匂が一面にただよい、又、あかあかと灯明もともっていました。いつ何時でも、お釈迦さまをお招きして説法されてもよいように、準備がすべてととのっていました。そして、お釈迦さまをお招きするまで、誰も中へ入ってはならぬと厳重に禁じられていたのです。

或る日、るり王子はお供の少年等と物珍らしそうにお堂の内部をのぞいていました。扉が開いていましたので余りの立派さに魅せられるように中に入ると、天の宮殿にいるような気持で有頂天になってたわむれ遊んでいましたが、るり王子はお釈迦さまの説法される獅子座にと登りますとちょこんと坐りました。この時、お堂の見廻りをしていた四五人の役人が、この容子を眺めてつかつかと入って来て、

「何をするか！」

(つづく)

年 新 賀 謹

大阪市天王寺区上之宮町二六―二

上宮学園

学園長 小林 大 巖

京都家政短期大学

学 長 三枝樹正道

京都府宇治市榎島町千足五〇

電話宇治(〇七七四)二一―一四

郵便番号六一―一

東山学園長

藤 原 弘 道

熊本市九品寺三―一―一

鎮西学園長

上 田 貞 雄

華頂学園長

水 野 隆 樹

京都市東山区知恩院山内

浄土宗保護司会理事長

栗 本 俊 道

東京都文京区大塚五丁目二番
西 信 寺 住 職

静岡県富士宮市東町三―二八

大頂寺 石 井 真 峯

電話(〇五三)六一三四六五番

郵便番号四一―八

近竜寺住職

松 濤 弘 道

栃木市万町二二―一四

電話(〇二八二)二一―〇八〇二番

光 明 寺

山 口 諦 存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

鎮西流根元地
聖光寺住職

小 林 忍 戒

京都市下京区寺町仏光寺上ル

喪中(孫恵一交通事故死)につき年賀欠
礼します

真仏教舎本部会長

裏 辻 賢 洲

松原山大善寺住職福岡市外福岡町

静岡市日吉町二―二

華 陽 院

堀 田 良 謙

だん王法林寺

信 ケ 原 良 文

京都・三条大橋東詰

三重県多気郡大台町下三瀬五五一

慶 雲 寺

北 出 立 法

天 光 院

真 野 龍 海

年 新 賀 謹

浄土宗議會議長

稲岡 覚 順

川口市北町二ノ五〇
西福寺

京都黒谷 西住院住職

戸川 靈 俊

京都市左京区黒谷町三〇
浄土宗議會議副議長
大阪工業大学教授

浄土宗議會議員

井原 文 雄

山口柳井市柳井津
瑞相寺

浄土宗議會議員

柴田 敏 夫

横浜市港北区菊名町
蓮勝寺住職

精薄施設 竜雲学園理事長
大照学園

香川県高松市仏生山町

細井 照 道

弘前市新寺町 貞昌寺
宗議會議員

赤平 昌 導

浄土宗議會議員

飯田 信 弘

四日市市中部三
光運寺

白幡 憲 佑

横浜市南区久保山
光明寺

神奈川県葉山町堀ノ内五六八

明照幼稚園

杉田 義 俊

電 (95) 〇一六二
一四二六

函館称名寺

住職 武藤 善 友

執事 須藤 隆 仙

長崎市鍛冶屋町

大音寺

本原 義 岳

(提案) 開宗八〇〇年記念行事

一ヶ寺一五重

五重相伝勸誡師

小布施 弘 学

長野市松代町長明寺

株式会社 安藤

代表取締役 安藤 宇 助

京都市東山区門前通東山線西入

075 (五六二) 〇六九〇 (法衣)
二四〇二 (仏具)

法然上人鑽仰会

佐藤 密 雄

佐藤 康 隆

中瀬村 信 常

竹村 昭 彦

宮居 香 山

安藤 行 信

佐藤 成 順
長谷川 丈

『関東浄土宗法度』

この二通の古文書は「関東浄土宗法度」と呼ばれるものであり、現在写真の如く鎌倉の光明寺と芝の増上寺に原物が残っている。この法度の内容は、

- 一、従来の本末関係を尊重し、本寺の命令に従うこと
- 一、談所（僧侶を養成する寺）に入り、一度浄土宗の僧となったら、以後他宗に転向しないように、入寺の時、誓約証文をとること。附則 本末関係は知恩院の意向を尊重すること。
- 一、同時に昇位・昇官した場合でも先輩・後輩の区別を守ること。
- 一、前もって内府（家康）から命令されたように、訴訟問題を起した僧は談林から追放し、他の談林に復学を認めない。
- 一、規定の修行年数を終了しないうちに、昇位・昇官して

はいけない。またその土地の寺に許可を得ないで勝手に法談を行なってはいけない。

右五カ条は徳川家康と相談して規めたものであるから、諸談林でもし違犯した場合には処罰する。

というようなことである。慶長二年（一五九七）九月、京都知恩院の住持満譽尊照が家康と相談して、関東浄土宗寺院の守るべき規則を定めている。この法度は一見なんの変哲もないように見えるが、近世初期の浄土宗寺院の動静を知るのに格好の史料である。まず宛所の問題であるが、光明寺文書には「関東本山光明寺住持」とあり、増上寺文書には「諸談林御住持」とある。これをみると関東本山は光明寺であり、増上寺は談林としてその下に位置している。そして諸談林とあるから、この外にいくつかの談林があったことがわかる。このころ関東浄土宗寺院の中で談林寺院として想定される寺院は、川越連聲寺・鴻巣勝願寺・岩槻浄国寺・千葉大蔵寺・小金東漸寺・瓜連常福寺など中世以来の由緒寺院である。十八檀林制度のように整備されたものではないが、かなり早くから関東浄土宗寺院の中に僧侶養成機関として談林制度が存在したことがわかる。また慶長二年といえば、家康が幕府を開く前であり、早くから家康と浄土宗の交流があったことが裏付けられる。

（宇高良哲）

鎌倉光明寺藏

國東諸寺家控之事

- 一 頃前本末の當位に之切不_レ可_レ寺
- 一 法清の_レ子徒歸_レ南_レ無_レ松成_レ地_レ以_レ不_レ取_レ當_レ嚴_レ神_レ自_レ入_レ寺_レ時_レ一_レ紙_レ丁_レは_レ申_レ付_レ去_レ付_レ頃_レ古_レ有_レは_レ法_レ有_レ未_レ持_レ而_レ以_レ未_レ禁_レ制_レ未_レ
- 一 同時_レ甚_レ内_レ日_レあ_レ後_レ不_レ下_レ相_レ違_レ未_レ
- 一 寺_レ財_レの_レ内_レ府_レの_レ改_レ去_レ法_レを_レ余_レ法_レ不_レ有_レ許_レ言_レ未_レ
- 一 今_レ年_レ臘_レの_レ改_レ世_レ未_レ未_レ其_レ中_レに_レ不_レ層_レの_レ改_レ法_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ

石_レ傳_レ得_レ 國_レ主_レ寺_レ未_レ相_レ違_レの_レ改_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ未_レ其_レ中_レに_レ不_レ層_レの_レ改_レ法_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ

廣長_レ貞_レ年九月廿五日_レ滿_レ興_レ未_レ訂_レ未_レ

法清持沙住持

國東諸寺家控之事

- 一 頃前本末の當位に之切不_レ可_レ寺
- 一 法清の_レ子徒歸_レ南_レ無_レ松成_レ地_レ以_レ不_レ取_レ當_レ嚴_レ神_レ自_レ入_レ寺_レ時_レ一_レ紙_レ丁_レは_レ申_レ付_レ去_レ付_レ頃_レ古_レ有_レは_レ法_レ有_レ未_レ持_レ而_レ以_レ未_レ禁_レ制_レ未_レ
- 一 同時_レ甚_レ内_レ日_レあ_レ後_レ不_レ下_レ相_レ違_レ未_レ
- 一 寺_レ財_レの_レ内_レ府_レの_レ改_レ去_レ法_レを_レ余_レ法_レ不_レ有_レ許_レ言_レ未_レ
- 一 今_レ年_レ臘_レの_レ改_レ世_レ未_レ未_レ其_レ中_レに_レ不_レ層_レの_レ改_レ法_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ

石_レ傳_レ得_レ 國_レ主_レ寺_レ未_レ相_レ違_レの_レ改_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ未_レ其_レ中_レに_レ不_レ層_レの_レ改_レ法_レ法_レ未_レ訂_レ未_レ

國東_レ貞_レ年九月廿五日_レ滿_レ興_レ未_レ訂_レ未_レ

東京芝増上寺藏

「浄土」講読規定

一部 定価 九十円

会費一力年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可
昭和四十四年十二月二十五日印刷
昭和四十五年一月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行人 法然上人鑽仰会
電話東京二六二局五九四四番
振替東京八二一八七番
東京都港区芝公園十九号地の一
浄土宗務支所内
編集室 法然上人鑽仰会

年 新 賀 謹

總本山 知恩院

門主 岸 信 宏

執事長 鵜 飼 隆 玄

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智 光

副住職 鷹 司 誓 玉

執事 北 川 惠 作

大仏殿 高德院

住職 佐藤 密 雄

浄土宗 宗務庁

東京心光院

戸 松 学 瑛

檀 林 伝 通 院

東京都文京区小石川三ノ一四ノ六

浄土宗 宗務支所

梅窓院

大本山 増上寺

法主 椎 尾 弁 匡

執事長 里 見 達 雄

中 島 真 孝

中 島 真 哉

東京都港区南青山二―二六―三八

祐天寺住職

巖 谷 勝 雄

東京都目黒区中目黒五―二四―五三

電話(712)〇八一九 一五三

大 野 法 道

鎌倉市材木座

大本山 光明寺

里 見 達 雄

東京都大田区田園調布

照 善 寺

田 丸 徳 成